

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02825

研究課題名(和文) 孝謙・称徳期にみる「王権」の構造的転換の研究

研究課題名(英文) Study on the structural transformation of "kingship" about Emperor Koken and Syotoku

研究代表者

堀 裕 (Hori, Yutaka)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50310769

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：先行研究や研究代表者の研究により、これまで孝謙・称徳天皇は、「天」に可否を問うことで、皇位継承者の決定を行っており、その「天」には仏教が関わっていることが明らかにされてきた。これらを踏まえ、本研究では、孝謙・称徳天皇による仏教的な「天」に依拠する現説は、父である聖武太上天皇没後にみられるものであり、孝謙・称徳天皇自身の王位の正当性に不安が残る中で、その権威に依存したものであることを明らかにした。あわせて、(1)道鏡の法王任命は、「天」によるものではないことを解明することで、有力な学説であった法王＝皇位継承者説は誤りであることを示し、(2)国分寺・国分尼寺の政策もこれらと一体であることを論じた。

研究成果の概要(英文)：Previously, prior research and research representative clarified the following points. It is that the Emperor Koken and Syotoku has entrusted the determination of the successor to the throne to the Chinese "heaven" which contains Buddhist thought. Based on these studies, in this research, the time when the Emperor mentioned about "heaven" is seen after the father Emperor Shomu died. With the doubt on the legitimacy of the emperor's own throne, the Emperor needed to rely on its authority. Also, (1) Appointment of "Ho-ou" is not due to heaven". Therefore, the leading theory, "Ho-ou" = the successor to the throne, is a mistake. (2) The policy of "Kokubunji" and "Kokubunji" which were temples erected throughout Japan were also integrated with these.

研究分野：日本古代史

キーワード：孝謙天皇 称徳天皇 道鏡 法王 国分尼寺 天皇霊 王権

1. 研究開始当初の背景

聖武天皇没後の政治史に関する古典的な理解として、「藤原仲麻呂政権」から「道鏡政権」への推移や、極端な仏教重視政策による腐敗・墮落が一般的であった。けれども、道鏡は「太政大臣禪師」や「法王」という地位に就いたものの、政務運営に関わった形跡を見出せず、近年は、とくに孝謙天皇や淳仁天皇、称徳天皇の意志や行動が注目されていた。このような、道鏡よりも、まずは孝謙・称徳天皇の意志に注目すべきであるという視点は継承すべきと考える。

称徳天皇の権威の構造を分析した重要な研究として、とくに八重樫直比古氏や勝浦令子の研究が挙げられる。なかでも勝浦氏の研究は、天神地祇や「天皇霊」(天皇の祖先霊)など天皇を支える霊的権威の中に、仏教が混入していく諸段階を示すとともに、称徳天皇の意思によって法王に任命された道鏡は、皇位継承者であると論じた点は、その後の研究に継承されていった。さらに、出家者が即位する伝統が、平安初期まで残存することまで指摘している。このほかにも重要な指摘の多い研究であるが、拙稿「八世紀の図讖と皇位継承」(『日本中世の NATION 3』岩田書院、2013年)でも一部指摘したように、孝謙・称徳天皇の皇位継承観や、「天」の思想と仏教や神祇信仰との関りについては、まだ検討余地があると考えられる。

関連して、高取正男氏が、称徳期の神仏混交から、桓武期の神仏隔離への展開に、「神道の自覚過程」を見出した点は注目される。孝謙・称徳期の伊勢神宮重視の施策を踏まえれば、当時は、仏教とともに、神祇も含めて変化したことが予測される。神仏を含めた、天皇を支える構造が転換した点に注目すべきである。

最後に、孝謙・淳仁・称徳期は唐の多大な影響を受けていることはいうまでもない。近年の東アジア世界の研究の進展を踏まえ得れば、アジア諸国との比較の視座も必要である。

以上の点から、研究が開始された当初の背景として、(1)孝謙・称徳天皇自身の意志を重視する研究史に従うべきであること、(2)孝謙・称徳天皇の「天」を中心とする天皇権威の構造に関する研究の必要があること。(3)仏教と神祇、皇位継承観など広く「天」に関わる問題からアプローチする必要があり、(4)アジア世界、とくに唐との比較を踏まえた研究も課題として考えられる。

2. 研究の目的

孝謙・称徳天皇の正当性を支える権威は、「日本古代の王権」や「東アジアの王権」のなかでどのような位置にあるのかを明らかにすることが目的である。

とくに、称徳天皇の宣命のなかに「皇位天授」の思想が現れる。それは、「天」が皇位

継承者の可否を判断するという考えであった。過去の研究では、道鏡が自ら即位するための策謀であるとみられていた。しかし、道鏡が台頭するより前の、孝謙天皇の時期からすでに「皇位天授」の思想に基づいた皇位継承の実例があり(大炊王立太子)、道鏡の発案とする説は成り立たないことは明らかである。では、孝謙・称徳天皇はなぜこのような思想を持ちだしたのかを解明しなくてはならない。その結果、直接・間接に、「王権の構造」にどのような変化をもたらしたのかを明らかにしたい。

このように天皇権威を支える「天」(それを構成する神・仏)と皇位継承の論理が構造的な転換が、より抽象的な(つまりは、唐と類似する)天の思想に接近することにより、「即自的な王権」から「対自的な王権」へと転換していく画期のひとつであったことを明らかにする。

3. 研究の方法

(1)「皇位天授」の思想の出現時期に注目する。結論を先に述べれば、孝謙天皇の後見人であった父聖武太上天皇の没後である点が注目される。王位継承者としての正当性に疑念をもたれることもあったため、もっとも有力な後見人の喪失が、関係する可能性があると予測される。

(2)「皇位天授」の思想のなかに仏教が混入している事実がある。「皇位天授」の思想の出現と仏教との関係を明らかにすることで、孝謙・称徳天皇の正当性を明らかにすることができる。と考える。

とくに道鏡の法王就任が、舍利出現を契機としていることが問題としてあげられる。勝浦氏は、この舍利出現を「皇位天授」の思想に基づいたものと考えたうえで、舍利は「天」(実質的には三宝)が、出現させたものである。法王となった道鏡は皇位継承者であると述べたのである。仮にこの説が妥当である場合、称徳天皇は重祚後、早くから道鏡を皇位継承者に据えたことになり、また仏教の影響を受けた「天」がその選択に大きな影響を与えたことになる。

(3)孝謙・称徳天皇が積極的に推進した、仏教政策、とくに国分寺・国分尼寺の整備事業は、上記の点と深く関連することが予測される。考古学の調査成果を踏まえつつ、おもに文献史料を利用し、具体的な施策のなかで、思想的な展開を傍証する方法を探る。

(4)孝謙・称徳天皇は、とくに伊勢神宮への対応を強化している。祥瑞や即位奉幣などから、「皇位天授」の思想の出現と、神祇信仰、とくに伊勢神宮との関係を明らかにすることができる。

(5)東アジアのなかで、「王権」を支える仏教信仰や祖先崇拜のありかたを比較して検討する必要がある。

4. 研究成果

(1) 国分寺と国分尼寺の政策展開と政治史の解明を行った。従来、その造営過程が問題とされることの多かった国分寺・国分尼寺の成立論だが、寺院としての活動、とくに僧尼にとってもっとも基本的な仏教行事である安居に重点を置くことによって、その成立時期の諸段階を明示することに成功した。ひいては、仏教的「天」の思想の生成過程を示唆する制度的な傍証を得た。

具体的には、国分寺・国分尼寺の安居成立には、天平感宝元年の安居と天平神護二年の二つの安居が画期となっていることを示した。前者は、聖武天皇讓位と孝謙天皇即位の時期のころにあたり、後者は、おおよ道鏡を法王に任命する契機となった舍利が出現した時期と重なり、翌年には正月金光明最勝会が成立している。

このように、国分寺・国分尼寺の成立に関わる二段階を示すととともに、孝謙・称徳天皇の「王権」の歴史的変遷と明確に連動していることを明らかにすることができた。

なお、この内容を含む報告は、東大寺で開催された研究会(東大寺要録研究会)で、「天皇と諸大寺、国分寺・国分尼寺の安居—『東大寺要録』所引「安居縁起」の基礎的検討—(2015年)と題して行い、その一部を「国分寺と国分尼寺の完成—聖武・孝謙・称徳と安居—」の題名で『国史談話会雑誌』56号(2015年)に掲載した。上記研究成果と関わる道鏡や孝謙・称徳天皇の施策について、「宗の成立と展開」(『仏教史入門ハンドブック』法蔵館、2017年)等で一般向けに解説するとともに、陸奥国国分寺と国分尼寺の調査成果に重点をおきつつ、仙台市で開かれた一般向けの講演会でも、「陸奥国分寺・国分尼寺の成立と展開—文献資料と考古学資料—」(2017年)と題して報告を行っている。

(2) 「皇位天授」の思想と、道鏡が就任した法王の関係についての解明を行った。道鏡の就任した法王という地位が、舍利出現を契機にしたことは明らかである。けれども、従来の研究では、その舍利出現が、道鏡の法王任命のために、天が与えたものと理解していたが、その点を明確に否定することができた。つまり、法王道鏡は皇位継承者ではないのである。

具体的な分析手法は、道鏡が法王に任命された時の称徳天皇の宣命と一般的な祥瑞出現の時の宣命を比較・分析した。その結果、一般的な祥瑞出現の時に、官人たちも叙位・任官されることがあるが、それは天皇が不徳であるにも関わらず、祥瑞が出現したのは官人の努力のおかげとする論理である。道鏡の法王任命も、あくまで道鏡が「助力したこと」が理由であり、天(仏)が道鏡を皇太子として認めた結果と論じることができないのである。

(3) 「皇位天授」の思想出現の背景と意義の解明を行った。「天」のなかに仏教的な尊格が加えられていることは、早くから注目さ

れていたが、おおむね聖武天皇の信仰の影響とするに止まる研究が多い。しかし、陸奥国産金にともなう聖武天皇の東大寺行幸の時を除けば、すべてが父聖武天皇の没後の孝謙・称徳天皇の現説で言及されている点は注目される。しかもそれらの現説は、孝謙・称徳天皇の皇位の正当性と関わる文言ばかりである。

つまり、「皇位天授」の思想とは、本来中継ぎであるはずの女性の天皇でありながら、皇位継承者を決めることのできない状況にあって、極めて不安定な孝謙・称徳天皇自身の正当性を示すものである。

(4) 「王権」の構造的な転換についての展望。このように、孝謙・称徳天皇が後見人を失ったことだけではなく、唐の諸制度の影響等を背景に、天皇権威を支える「天」(それを構成する神・仏)と皇位継承の論理が構造的に変化しつつあったことは展望できた。しかしながら、「即自的な王権」から「対自的な王権」へと転換していく画期のひとつであったという点については、現時点では見通しに止まっている。

なお、(3)(4)については、「盧舎那如来と法王道鏡 - 仏教からみた統治権の正当性 - 」と題した論文を入稿している(2018年度刊行予定)。口頭報告では、仙台古代史懇話会において、「皇位天授の思想」と法王道鏡(2017年)のテーマで、読史会でも「道鏡任法王の基礎的考察」(2017年)のテーマで各々報告を行ったほか、韓国の忠南大学の外国専門家招聘講演会では、「王権」研究と天皇の歴史的展開—死・身体・霊—(2017年)をテーマに、またクワトロセミナーではThe death of Japanese Emperor in the 11th century, and “translation” of “The King's two bodies”(2018年)をテーマに、国際学会での招待講演でも触れることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

(1) 堀 裕 「国分寺と国分尼寺の完成—聖武・孝謙・称徳と安居—」、『国史談話会雑誌』 2015年、pp45-60

[学会発表](計 6件)

(1) 堀 裕 The death of Japanese Emperor in the 11th century, and “translation” of “The King's two bodies”、クワトロセミナー 東北大学(招待講演)(国際学会) 東北大学、2018年2月22日

(2) 堀 裕 「陸奥国分寺・国分尼寺の成立と展開—文献資料と考古学資料—」、仙台市富沢遺跡保存館(地底の森ミュージアム)主

催講演会（招待講演）、仙台市富沢遺跡保存館、2017年11月19日

(3) 堀 裕 「道鏡任法王の基礎的考察」、読史会大会、芝蘭会館（京都市）、2017年11月3日

(4) 堀 裕 「「皇位天授の思想」と法王道鏡」、仙台古代史懇話会、仙台市戦災復興記念館、2017年3月11日

(5) 堀 裕 「「王権」研究と天皇の歴史的展開—死・身体・霊—」、外国専門家招聘講演会（招待講演）（国際学会）、韓国 忠南大学、2017年1月25日

(6) 堀 裕 「天皇と諸大寺、国分寺・国分尼寺の安居—『東大寺要録』所引「安居縁起」の基礎的検討—」、第14回東大寺要録研究会、東大寺総合文化センター、2015年6月20日

〔図書〕（計 3 件）

(1) 堀 裕 「盧舎那如来と法王道鏡 - 仏教からみた統治権の正当性 - 」、栄原永遠男編『東大寺の新研究3』、法蔵館、2018年（刊行予定）

(2) 堀 裕 「宗の成立と展開」、『仏教史入門ハンドブック』、法蔵館、2017年、p172 - 175

(3) 堀 裕 「大寺・定額寺から御願時へ」、『仏教史入門ハンドブック』、法蔵館、2017年、p176 - 177

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀 裕 (Hori, Yutaka) 東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50310769